

## 論文要旨

研究科	言語社会研究科	氏名	趙秀全	学籍番号	LD091013
題目	日本文学の中の孝文化—平安時代を中心として—				
<p>本研究は平安という時代を中心に、「孝」を「孝文化」として捉え、とりわけ平安漢詩・物語の中の「孝」を分析することに主眼を置きながら、日本における「孝文化」の展開を辿ってみた。「孝」については、「孝道」や「孝思想」という捉え方があるように、必ずしも統一されていないのが現状である。そもそも「孝」は大陸に由来するものであったが、日本に受容され、社会に適応する形で滲透したことを考えると、「孝文化」とするのが実態を反映した捉え方であろう。</p> <p>古来、「孝」自体に関する研究は盛んに行われてきたが、文学という立場から、「孝」の問題を捉える研究はそれほど進んでいないと言える。そこで本研究では、文学的立場から「孝」を考察し、平安時代の「孝文化」に還元できるように努めた。なお、これまでの先行研究を調べた限り、「孝」を宗教的、また儒教的な観点から捉える論考が多く見受けられるが、本研究ではあえてそのどちらにも拘らず、できる限り多くの日中の文献資料にあたることを心掛けながら論を進めた。以下、本研究の概論を示す。</p> <p>本研究は全3部構成となっている。まず、「序」では、本論の分析の視角、意義、そして先行研究における問題点を取り上げた。そのなかでも、特に平安時代の文学に焦点を縛った理由について、考えるところを提示した。</p> <p>第一部「古代日中における「孝」の歴史的展開」は、「孝」に関する基礎的考察として、主に歴史的な文脈から日中両国における「孝」、そして『孝経』の変遷を把握することを目的とするもので、全2章で構成される。第一章「中国における「孝」と『孝経』の展開—漢・魏晉南北朝・隋唐—」では、儒教經典で「孝」の集大成と目される『孝経』の成立及びその内容に注目した。そのうえで、『孝経』の歴史的展開を把握するために、漢代から隋唐までの歴史段階を射程に入れ、目まぐるしい王朝交替にもかかわらず、『孝経』は重要な位置を保持し、隋唐の時代になると、「孝」が爛熟した文化になったとい</p>					

氏名	趙秀全
<p>うことを確認した。第二章「日本における「孝」と『孝経』の展開—奈良朝以前から平安朝まで—」では、奈良以前そして奈良・平安といった歴史段階に焦点を当て、それぞれの時代における「孝」の様相を捉えることにした。奈良朝以前における「孝」の有無を確認したうえで、『大宝律令』以来、奈良・平安朝の孝行奨励の実例を、六国史にもとづいて整理・考察した。これと同時に、孝謙朝と清和朝に見られる『孝経』に関する二度の改革にも注目した。「天下をして家ごとに孝経一本を蔵め」という孝謙天皇の勅命、大学寮で唐の玄宗注の『御注孝経』をテキストとして用いよと命じた清和朝の姿勢、これらの改革は単に大陸文化を模倣することに止まらず、日本での「孝文化」の普及を助長するうえで、大きな意味があったことが確認できた。</p> <p>第二部「公的空間における文学と「孝」—漢詩と史書をめぐって—」は、公的空間に属する文学を考察の対象とし、とりわけ平安官人の漢詩、そして六国史にみえる天皇の孝徳の有り様を検討したもので、全3章で構成される。第一章「『孝経』に関わる漢詩—「積奠」を中心に—」では、平安時代における重要な行事の一つである「積奠」に着目し、儀式後の作文会で詠まれた『孝経』に関わる漢詩を主な考察対象とした。ことに官人であり漢文学者でもある菅原道真や大江匡衡などといった人物の詠作について、それぞれの詩の意味の確認作業を行なったうえ、詩に託された官人たちの真意を掘り下げた。第二章「「書始」と『孝経』」では、まず、これまでの「書始」の研究史を踏まえながら、日中の史料にもとづき、「書始」の初出例に対する再検討を行なった。そのうえで、とりわけ一条天皇の皇子である敦康親王の「書始」の儀に注目し、その場で詠まれた漢詩群へ考察を加えた。このように、第一・二章を通して、『孝経』の儀式への関与に焦点を縛り、律令官人または貴族官人（中流貴族を含む）の詠んだ漢詩から、公的世界に逢着した「孝」・『孝経』の新たな意義を明らかにした。そして、第三章「公・私的空間にみる天皇の孝徳—六国史と『源氏物語』への考察を中心として—」は、古代天皇の孝徳を考察したもので、六国史と作り物語の『源氏物語』を手がかりとしたものである。まず物語と「日本紀」すなわち六国史とを比較し、その関連性を示した。それから、六国史から天皇の孝徳にかかわる記事を析出し、その出典を提示したうえで、天皇の孝徳に対する描写と、それぞれの官選史書にみえる描写との共通性を指摘した。この</p>	

氏名	趙秀全
<p>なかで、特に『日本書紀』にみえる天皇像の固定化が、後世へ与えた影響とその意義を述べた。さらに、歴史書において、儒教的な有徳為君の仁政思想がいかに受容されたか、その様相を検討した。それを踏まえたうえで、『源氏物語』の桐壺帝の遺言への不履行により、「不孝」を犯した朱雀帝について考察した。史実を旨とする歴史書と、虚構を旨とする物語は、一見して相容れないようでありながら、実は「孝」を仲立ちとして、深く関わっていることを確認した。また、歴史と物語との比較を通して、天皇の「徳」の重要性と関連性を明らかにした。</p> <p>第三部「私的空間における文学と「孝」—物語文学を中心に—」では、主に物語文学を取り上げた。具体的には『うつほ物語』『源氏物語』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』といった作品を考察の対象とした。と同時に、日記文学、歴史物語など、他のジャンルの作品を補助資料として利用し、それぞれの物語に語られる「孝」の在り方を確認した。なお、第三部は全4章で構成される。第一章『うつほ物語』の俊蔭巻にみる「孝」—源順の「五嘆吟」との関わりを通して—では、『うつほ物語』とその作者とされる源順の「五嘆吟」との関わりを中心に考察した。これまでの研究では、『うつほ物語』の仲忠孝養譚は、中国大陸から伝来した『孝子伝』を典拠として構想されたと考えられてきた。本章では、これまでの先行研究を再検討し、源順の「五嘆吟」を介在させながら、『孝子伝』とは別に、三史や『晋書』、『三国志』など、新たに典拠と思われる文献を提示した。『うつほ物語』は、人物造型にあたり、とりわけ「孝」を色濃く用いた作品である。平安物語のなかでは、極めて特異な作品と言えよう。本章は出典研究を中心とするが、作者と見なされる源順が、物語を通して伝えようとした思いにも言及した。続いて、第二章では、『源氏物語』に登場する人物を中心に、『源氏物語』における「孝」の在り方を論じた。まず第一節では、『紫式部日記』に見られる『孝経』の記録について分析することにより、作者である紫式部と「孝」との関わりを明示した。そのうえで、『源氏物語』における「孝」の用語例を分析し、その特徴を指摘した。第二節では、光源氏を中心に、「密通」と「孝」との関係性を明らかにした。法的には、光源氏の密通は「不孝」に繋がるものである。しかし、光源氏に「不孝」の意識があるのか、この点に</p>	

氏名	趙秀全
<p>疑問を抱きながら、その「不孝」の意識をまず検討した。そして、父・桐壺院の遺志を守る彼の振る舞いへの考察を行ない、密通と「不孝」との関わりを論じた。本節の結びでは、一条天皇と敦康親王、唐の太宗と高宗の両国の史実にみえる親子関係が、桐壺帝と光源氏の親子と重なることが、作者の発想の源泉であることを再確認した。第三節では夕霧を対象とし、父光源氏への「孝」を取り上げた。夕霧は光源氏の厳しい教育のもとで学問に励んだことと、藤原師輔の家訓である『九条右丞相遺誠』を媒介として夕霧の孝心を再検討し、源氏父子の親子の在り方を確認した。第四節では、物語の中で光源氏に次いで重要な人物である内大臣に注目し、内大臣の母への孝心が、権力闘争の中で変化していく様相を確認した。そして内大臣という人物の性格を通して、現実社会で求められた理想的官人との間にズレがあることを論じたうえで、あえて作者の意図について述べてみた。第五節では、蛭巻・常夏巻に登場する対照的な人物である玉鬘と近江君を取り上げることにした。光源氏と玉鬘という擬似親子が交わした言葉に「不孝」があった。そこで、この「不孝」に関する諸注釈書を確認しながら、「不孝」の意味を検討した。内大臣と近江君の実親子の間にも、「孝」を含んだ会話が交わされる場面があった。光源氏が玉鬘に「孝」を求めるに対して、内大臣は近江君の「孝」を拒否している。果たして女性の「孝」はどこにあるのか、これについて、中国の古典文献との比較を行いながら、考察を試みた。続いて第三章では、『浜松中納言物語』に登場する中納言を中心として、唐后との関わりを含めて、中納言における「孝」の在り方を考察した。中納言は孝養の志をもって唐で転生した父に会うために唐へ渡った。物語の舞台を異国に据えた『浜松中納言物語』と他の物語に見える渡唐譚の章段と比較したうえで、『浜松中納言物語』の独自性を考察し、中納言の「孝」の物語における位置づけについても論じた。第四章では、『松浦宮物語』の主人公である氏忠の「孝」と「忠」を中心に、作中に見られる彼の親への「孝」と唐帝への「忠」との葛藤について、考察を行なった。さらに、遣唐使とともに渡唐して玄宗皇帝の寵臣となり、再び帰朝を果たすことのなかった阿倍仲麻呂の事蹟が、作品に投影している可能性を指摘した。最後に氏忠の「忠」の問題から、中世社会で活躍した武士の「忠」の問題を提起して、本論の幕を閉じた。</p>	

氏名	趙秀全
<p>「むすびと今後の課題」では以上を総括し、今後、『松浦宮物語』を発端として、平安文学の中の「孝文化」の位置づけを改めて考察するとともに、中世文学の中の「孝文化」を研究していくための展望を示した。末尾に付載した参考文献は、本論中には直接引用しなかったが、本研究をまとめる際、その中から発想のヒントを得たものを掲載した。</p>	